

ヘブライ語聖書における災害・苦難

—新共同訳聖書の訳語「災害」「災い」
「災難」「苦難」をめぐって—¹

日 原 広 志

「旧約聖書は災害や苦難について何を語っているのか？」今日そのような問いを以て邦訳聖書を開こうという人は少なくないであろう。本論は災害や苦難を意味するヘブライ語の語義と射程について考察するものである。目的はあくまでも、答えを提供することにはなく、自ら聖書から聞いていきたいと志向する人たちの黙想や考察のための材料を提供することにある。そのため扱う範囲としては、新共同訳旧約聖書において「災害」「災い」「災難」「苦難」4種の日本語の訳語いずれかを当てられた原文のヘブライ語単語だけに限定している。新共同訳旧約聖書において訳語「災害」は16回、「災い」は324回、「災難」は32回、「苦難」は69回登場する²。「災害」と訳された16箇所はヘブライ語に戻すと5単語（נָגַף, מַגַּפָּה, מַכָּה, רַעָה, שָׁמָם）に相当する。「災い」と訳された324箇所はヘブライ語に戻すと20単語（אִיד, אוֹי, אֹן, אֱלִילִי, אֹן, אֱלִילִי, אֹן, אֱלִילִי, אֹן, אֱלִילִי, אֹן, אֱלִילִי, אֹן, אֱלִילִי, אֹן, אֱלִילִי, אֹן, אֱלִילִי, אֹן, אֱלִילִי）に相当する。「災難」と訳された32箇所はヘブライ語に戻すと9単語（אֹן, בְּלֵהָה, הוּהוּ, מַגַּפָּה, פִּיד, צָרָה, רַעָה, קִשָּׁה, צָרָה, רַעָה）に相当する。「苦難」と訳された69箇所はヘブライ語に戻すと7単語（תְּלָאָה,

1 本論は日本バプテスト連盟「教会はなお聞く『聖書に現実に経験に』—東日本大震災と原発事故が問いかける宣教・神学フォーラムⅡ—」（於日本バプテスト浦和キリスト教会）において2013年9月10日に行われた講演『ヘブライ語聖書に聞く災害・苦難』を、当日の質疑を踏まえて加筆修正したものである。

2 計上はZ・イエール監修（近藤司朗編）『新共同訳旧約聖書語句事典』（教文館、1992）による。

מוצק, צר, צרה, מצר, רע, רעה) に相当する。以上まとめて、新共同訳の「災害・災い・災難・苦難」という4種類の訳語は、28種類のヘブライ語が元になっていると分かる。その関係を以下の表に示す。

【表】新共同訳で「災害」「災い」「災難」「苦難」と訳されたヘブライ語28語

		新 共 同 訳 の 訳 語			
seq.	単語	「災害」(16)	「災い」(324)	「災難」(32)	「苦難」(69)
1	דָּאָה		23 (申32:35, サム下22:19, ヨブ18:12, 21:17, 30, 30:12, 31:3, 23, 詩18:19, 箴1:26, 27, 6:15, 17:5, 27:10, エレ18:17, 46:21, 48:16, 49:8, 32, エゼ35:5, オバ13, 13, 13)		
2	אָוִי		18 (民21:29, 24:23, イザ3:9, 11, 6:5, 24:16, エレ4:13, 10:19, 13:27, 15:10, 45:3, 48:46, 哀5:16, エゼ16:23, 24:6, 9, ホセ7:13, 9:12)		
3	אָוֶן		17 (民23:21, ヨブ4:8, 5:6, 15:35, 詩55:4, 11, 90:10, 箴22:8, イザ1:13, 29:20, 32:6, 59:4, 6, 7, エレ4:15, ハバ1:3, 3:7)	1 (箴12:21)	
4	אֲלִילִי		1 (ヨブ10:15)		
5	בְּלִהָה			1 (詩73:19)	
6	הָהָה		1 (エゼ30:2)		
7	הוּהָה		3 (詩57:2, エゼ7:26, 26)	1 (イザ47:11)	
8	הוּרִי		40 *		
9	תְּלַהָה				1 (ネヘ9:32)
10	נִגְעָה		4 (出11:1, 列上8:37, 歴下6:28, 29)		
11	נִגְרָה		2 (出7:27, ヨシ24:5)		
12	נִגְעָה	1 (ヨシ22:17)	3 (出12:13, 30:12, 民8:19)		
13	מִגַּפָּה	8 (出9:14, 民17:13, 14, 15, 25:8, 9, 18, 19)	2 (民31:16, 歴下21:14)	1 (歴上21:17)	
14	נִכָּה		1 (レビ26:24)		
15	מִכָּה	4 (申28:59, 59, 61, 29:21)	2 (レビ26:21, サム上4:8)		

		新 共 同 訳 の 訳 語			
seq.	単語	「災害」(16)	「災い」(324)	「災難」(32)	「苦難」(69)
16	עָבַר		4 (ヨシ7:25, 25, 歴上2:7, 7)		
17	עָמַל		3 (詩7:15, 17, 10:7)		
18	פִּיד			1 (箴24:22)	
19	מוֹצֵק				1 (ヨブ36:16)
20	צָרַר			1 (歴下28:22)	
21	צָר		3 (ヨブ38:23, 詩106:44, イザ30:20)		17 (サム下22:7, ヨブ36:16, 19, 詩4:2, 18:7, 32:7, 59:17, 66:14, 102:3, 107:6, 13, 19, 28, 119:143, イザ25:4, 26:16, 63:9)
22	צָרָה		4 (ヨブ27:9, 詩37:39, 71:20, 143:11)		38 * * * * *
23	מִצָּר				2 (詩118:5, 哀1:3)
24	קָשָׁה			1 (サム上5:7)	
25	רָע		37 * *	2 (箴11:15, 19:23)	1 (詩94:13)
26	רָעָה	2 (創19:19, エレ28:8)	129 * * *	21 (サム上6:9, 10:19, 25:26, サム下16:8, ヨブ2:11, 詩91:10, 箴1:33, 13:21, 17:13, 20, 22:3, 24:16, 27:12, コヘ8:6, 10:5, エレ2:27, 28, ダニ9:12, 13, ヨナ1:7, 8)	7 (詩35:26, 88:4, 90:15, 94:23, 107:26, 箴28:14, エレ48:16)
27	רָעָה		18 (出5:22, ヨシ24:20, サム上25:34, 列上17:20, 歴上16:22, 詩44:3, 74:3, 94:16, 105:15, 箴13:20, イザ31:2, エレ10:5, 25:6, 29, 31:28, ミカ4:6, ゼファ1:12, ゼカ8:14)		
28	שָׁמַם	1 (サム上5:6)			
	意識		9 * * * * *	2 (サム上6:9, ダニ9:12)	2 (ダニ12:1, ネヘ9:32)

上記表は新共同訳において「災害」「災い」「災難」「苦難」と訳されたヘブライ語28語を語根のアルファベット順に並べたものである³。なお紙幅の都合

3 通番1のエード(אֵיד)は語根ウード(אוּד)として、通番9のテラーア(תְּלָאָה)は語根ラーア(לָאָה)として、通番13のマッゲーファー(מַגְפָּה)は語根ナーガフ(נָגַף)として、通番15のマッカー(מַכָּה)は語根ナーハー(נָחָה)として、通番19のムーツァーク(מוֹצֵק)は語根ツーク(צוּק)として、通番23のメーツァル(מִצָּר)は語根ツァーラル(צָרַר)として、それぞれ表の当該位置に置かれている。

上、件数の多いものは*を付して脚注に章句群を記した⁴。

-
- 4 件数が多い等の理由から表に収められなかった章句群は以下の通りである。
- * 「災いだ」と訳されたホーイは 40 回 (イザ 1:4, 24, 5:8, 11, 18, 20, 21, 22, 10:1, 5, 17:12, 18:1, 28:1, 29:15, 30:1, 31:1, 33:1, 45:9, 10, エレ 22:13, 23:1, 30:7, 47:6, 48:1, 50:27, エゼ 13:3, 18, 34:2, アモ 5:18, 6:1, ミカ 2:1, ナホ 3:1, ハバ 2:6, 9, 12, 15, 19, ゼファ 2:5, 3:1, ゼカ 11:17) 登場する。
- * * 「災い」と訳されたラアは 37 回 (申 30:15, ヨシ 23:15, 列上 5:18, 22:8, 18, 歴下 18:17, ヨブ 5:19, 30:26, 31:29, 詩 7:5, 10, 10:6, 23:4, 49:6, 54:7, 56:6, 73:8, 78:49, 121:7, 140:12, 箴 12:21, 13:17, 15:15, 21:12, 31:12, イザ 7:15, 16, 31:2, 32:7, 45:7, エレ 7:6, 25:7, アモ 6:3, ミカ 1:12, ハバ 2:9, 9, ゼファ 3:15) 登場する。
- * * * 「災い」と訳されたラーアーは本文に 128 回 (出 10:10, 32:12, 14, 申 29:20, 31:17, 17, 21, 29, 32:23, 士 2:15, サム上 25:17, 26, サム下 17:14, 19:8, 8, 24:16, 列上 9:9, 11:25, 14:10, 21:21, 29, 29, 22:23, 列下 8:12, 14:10, 21:12, 22:16, 20, 歴上 4:10, 7:23, 21:15, 歴下 7:22, 18:7, 22, 20:9, 25:19, 34:24, 28, ヨブ 42:11, 詩 15:3, 27:5, 34:20, 22, 35:4, 37:19, 38:13, 40:15, 41:2, 8, 70:3, 71:13, 24, 144:10, 箴 14:32, 15:28, 16:4, 27, コヘ 11:2, イザ 7:5, 47:11, エレ 1:14, 2:3, 4:6, 5:12, 6:1, 19, 11:11, 12, 14, 15, 17, 23, 15:11, 16:10, 17:17, 18, 18:8, 11, 19:3, 15, 21:10, 23:12, 17, 25:32, 26:3, 13, 19, 19, 29:11, 32:23, 42, 35:17, 36:3, 36:31, 38:4, 39:16, 40:2, 42:10, 17, 44:2, 11, 17, 23, 27, 29, 45:5, 48:2, 49:37, 51:2, 60, 64, 哀 1:21, 3:38, エゼ 6:10, 7:5, 5, 14:22, ヨエ 2:13, アモ 3:6, 9:4, 10, ヨナ 3:10, 4:2, ミカ 2:3, 3, 3:11, ゼカ 1:15, 7:10) 登場する。この他に BHS 脚注による読み替え指示 1 回を加えて計 129 回である。その 1 回とはエレミヤ 17 章 16 節「わたしは、災いが速やかに来るよう／あなたに求めたことはありません。痛手の日を望んだこともありません。あなたはよくご存じます。わたしの唇から出たことは／あなたの御前にあります。」である。そこでは本文メーローエー「羊飼いから」に対し、BHS 脚注はラーアー「災いへ」に読み替え指示を出し、新共同訳もこの立場で「災いが速やかに来るよう」と訳している。
- * * * * 新共同訳の「災い」324 回のうちヘブライ語本文には相当する単語のない意識が 9 箇所 (ヨブ 4:8, 詩 111:6, 51:16, 91:14, イザ 15:9, 51:19, エレ 18:11, 36:31, 40:3) 存在する。ヨブ記 4 章 8 節「災いを耕し、労苦を蒔く者が／災いと労苦を収穫することになっている。」の「災いと労苦を収穫する」は本文「それを収穫する」からの意識。詩編 11 編 6 節「災いの火」は本文「火の罨 (פּוּחִים)」からの意識。同 51 編 16 節「流血の災いから」は本文「流血から」からの意識。同 91 編 14 節「災いから逃れさせよう」は本文「逃れさせよう」からの意識。イザヤ書 15 章 9 節「災いを加え」は本文「加え」からの意識。同 51 章 19 節「二組の災いが」は本文「二組が」からの意識。エレミヤ書 18 章 11 節「災いを備え、災いを計画している」の「災いを計画している」は本文「計画 (מַחְשָׁבָה) を計画している」からの意識。同 36 章 31 節「災いをください。この災いは」の「この災いは」は関係代名詞 (אֲשֶׁר) 以下を独立文として和訳するための意識。最後に同 40 章 3 節「災いをください」は本文「来たらせ」からの意識である。
- * * * * 「苦難」と訳されたツァーラーは 38 回 (創 35:3, 申 31:17, 21, サム上 10:19, 26:24, サム下 4:9, ネヘ 9:27, ヨブ 5:19, 詩 9:10, 10:1, 20:2, 22:12, 25:22, 34:7, 18, 46:2, 50:15, 54:9, 77:3, 81:8, 86:7, 91:15, 120:1, 138:7, 箴 1:27, 11:8, 12:13, 17:17, 21:23, 24:10, 25:19, イザ 8:22, 33:2, 63:9, エレ 14:8, 16:19, ダニ 12:1, ヨナ 2:3) 登場する。

原語と訳語は互いに重複している。ネゲフ (נֶגֶב), マッカー (מִכָּה) は章句によって「災害」「災い」と訳し分けられ、アーヴェン (אוֹן), ホーヴァー (הוּוּה) は「災い」「災難」に、ツアル (צָר), ツァーラー (צָרָה) は「災い」「苦難」と各2語に訳され、マッゲーファー (מַגְפָּה) は「災害」「災い」「災難」に、ラア (רָע) は「災い」「災難」「苦難」と各3語に訳され、ラーアー (רָעָה) に至っては「災害」「災い」「災難」「苦難」の4語全てに訳し分けられている。このことはそもそも「災害」「災い」「災難」「苦難」はいずれの言語においても相互に近い交換可能なケースもある概念であることを物語る。また新共同訳の翻訳の特色をも表しているといえよう。つまり新共同訳は本文のヘブライ語に一意的な訳を目指すことよりも、同じ単語であっても文脈に応じて最適な訳を日本語読者のために提供しようとしているのである。上記表で示した新共同訳の翻訳上のばらつきは、ヘブライ語既習者にとってのみ、短所と映るかも知れない。新共同訳聖書を読んでも、一意的に本文のヘブライ語を連想し難いという点において。しかし、今日のような時代状況下で、旧約聖書から災害や苦難について学び直したいと願うならば、新共同訳の持つ豊富な原語群がむしろ長所になると言えるのではないか。なぜなら、日本語4語だけからの連想を遥かに超えて、実に28語ものヘブライ語が災害や苦難についての像を多角的・重層的に提供してくれるからである。この証言の多様性は、私達に災害や苦難に対してどのように向き合うかについて示唆を与えるであろうし、特に宗教者に対しては、災害や苦難を安易に説明しようとする信仰的態度に是正と相対化を迫る機能を果たしてくれるであろう。(ここで想定しているのは、例えば自然災害を天罰・神罰と看做し被災地を二重三重に苦しめる考え方や、苦難の信仰的意義を強調する余りに最も立場の弱い領域に甘受のみを強要する誤り等である)。そのようなわけで、今日、新共同訳の訳語「災害・災い・災難・苦難」から出発してヘブライ語28語の語義と射程について考察することは有益な事と考える。

方法としては、当該ヘブライ語を原意にまで遡ることにより、他の類義語とは異なる固有の語義を抽出する⁵。そしてその語義に照らして、当該語が

5 以下原意の抽出は旧約聖書ヘブライ語辞書 F. Brown, S. R. Driver and C. A. Briggs. *The Brown-Driver-Briggs Hebrew and English Lexicon: With an Appendix Containing the Biblical Aramaic.* (Peabody, Massachusetts: Hendrickson Publishers, 1997) による語根の意味ならびに古代近東諸言語との比較による。(以下『BDB』と表記する)。

聖書本文に対して持つ射程と機能について確認する⁶。全章句を扱うことは出来ないため、特に有益と思われる章句に限って考察する。また上記表のアルファベット順に個別に見ていくことは冗長に過ぎるため、以下のグループに分類した。

A からだ性	קשה, עמל, תלאה, און, איד
B 災いの叫び	הוי, הה, אללי, אוי
C 神が撃つ	מכה, נכה, מגפה, נגף, נגף, נגע
D 悪	רעע, רעה, רע
E 苦難	מצר, צרה, צר, צרר, מוצק
F その他	שמם, פיד, עכר, הוה, בלהה

当然ながら、語義の互いに重複し合う類義語における分類には限界があり、あくまでも便宜的なグループ分けである点お断りしておく。

A からだ性 (エード, アーヴェンとアーマール, テラーアー, カーシャー)

まず災害が生身の人間に及ぶものであるという基本を想起させてくれる 5 語を便宜上 “からだ性” というグループにまとめた。

a エード (איד)

エードはヘブライ語聖書に24回登場する⁷。この24回のうち新共同訳は23回を「災い」と訳しており、災害を表す術語であると分かる⁸。以下に数例の章句を紹介する⁹。

6 本来言語には固有不変の語彙はなく、時代と状況の中で語義と用法は流動的に変遷するものである。その限界性をわきまえた上で、本論においては現代への適用としての観点を重視してこの方法を採用した。

7 以下本論におけるヘブライ語聖書における語数の計上については Abraham Even-Shoshan, (ed.) *A New Concordance of the Old Testament Using the Hebrew and Aramaic Text* (Jerusalem: Kiryat Sefer Publishing House LTD., 1993) 及び BibleWorks に基づく。

8 新共同訳は残り 1 回のエードを「不幸」(箴 24:22) と訳している。

9 本論では特に断りのない限り聖書は新共同訳を使用する。章句中に本論考察対象 28 語がある場合は、「災害」「災い」「災難」「苦難」以外の訳であっても括弧付ヘブライ語にて記した。但し、本文上の語形ではなく、識別のための基本形のみを記している。なお、章句中の全角スラッシュ (/) は改行を表す。

エード（災い） 体が悲鳴を上げる程の重荷としての災い

ヨブ記21章17節 神に逆らう者の灯が消され、災い（**71A**）が襲い／神が怒って破滅を下したことが何度あろうか。

箴言17章5節 貧しい人を嘲る者は造り主をみくびる者。災い（**71A**）のときに喜ぶ者は赦されない。

オバデヤ書13節 その災い（**71A**）の日に／わが民の門に入ってはならない。その災い（**71A**）の日に／苦しみ（**7A7**）を眺めていてはならない。その災い（**71A**）の日に／彼らの財宝に手を伸ばしてはならない。

エード（**71A**）は動詞ウード（**71A**）「曲げる」「重荷を負う」から派生の男性名詞である。いわばエードは災害の持つ体の曲がる程の重荷を負うような側面を表す語であると言い得る。それ故エードは、災害が生身の人間を直撃するものであり、本来人間には負いきれないものであるという真理を内包している。身体的苦しみの比喩的術語であるエードは、災いというものに対して人間がなすべき正しい振る舞いは何かを厳しく問う機能を持っている。それは災害を罰と査定する安直な姿勢に対する歯止めとなるものである。ヨブは災害がしばしば、本当に罰を受けるべき悪人の地域や階層に臨むことが稀である現実の不条理を訴える（ヨブ21:17）。箴言では、貧者への嘲笑と他者の不幸を喜ぶことを並行させ、エードに見舞われるのはむしろ社会的弱者であり、他者がエードに遭うのを見て喜ぶことを造り主への罵りの罪と警告している（箴言17:5）。この格言は、他者の蒙る災害を造り主の下した罰と解釈して喜ぶ全ての宗教的誘惑に対する厳しい歯止めとなっている。オバデヤは兄弟国ユダの滅亡に際し略奪に加わる等無慈悲な振る舞いをしたエドムの非道を三重のエードによって告発している（オバ13）¹⁰。

10 外国であるエドムが「門に入る」自由があるということは、ユダの防衛が既に機能しなくなっている状況を指す。その時に「門に入らない」選択は、兄弟国ユダを独立した尊厳ある存在として重んじることであり、自分が城壁・城門となることを意味する。

b アーヴェン (אָוּן) とアーマール (עָמַל)

アーヴェンとアーマールの両語は並用されることが多いので一緒に扱う。

アーヴェンはヘブライ語聖書に77回登場する。この77回のうち新共同訳は17回を「災い」と訳し、1回を「災難」と訳している¹¹。災害よりも悪の概念に親近性が高い。そのため、先ずヘブライ語における「悪」の中心的術語であるラアとの比較からアーヴェンの射程を確認したい。

アーヴェン (災難) 疲弊の深刻な諸症状としての災難

箴言12章21節 神に従う人はどのような災難 (אָוּן) にも遭わない。神に逆らう者は災い (עָו) で満たされる。

男性名詞アーヴェンの原意は「疲れ果てさせる」であり、そこから悩み、悲しみ、転じて邪悪の意味を持つに至った。つまりアーヴェンは疲弊が生み出す様々な現象を射程に持つ語である。箴言12章21節はアーヴェンを「災難」と訳す唯一の章句である。楽天的な応報主義の宣言の背後に、義人はラアに至る心配はないがアーヴェンに至る可能性はあることを表白している。アーヴェンの指す悪事は、邪悪な人間だから犯す悪事ではなく、人間の許容量を超えた疲弊の様々な果実の一つとしての悪なのである。

一方のアーマールはヘブライ語聖書に55回登場する。この55回のうち新共同訳は3回を「災い」と訳している。殆ど「労苦」と訳される。因みに、イザヤ書の「苦難の僕の詩」では「苦しみの実り」(イザ53:11)である¹²。以下にアーヴェンとアーマールが共に現れる2例を紹介する。

11 新共同訳はアーヴェンを他の箇所では例えば「悪」(詩 10:7, ヨブ 22:15), 「忌むべきもの」(ホセ 12:12) 等と訳出している。

12 イザヤ書 53 章 11 節前半「彼は自らの苦しみの実り (עָמַל) を見／それを知って満足する。」のアーマール「苦しみの実り」は本論対象の訳語ではないが、ヘブライ語本文の強調語順を活かして訳せば 11 節前半は「外ならぬ彼の魂のアーマールからこそ、彼は見るだろう。彼はそれを知ることで満足するだろう」となる。つまり労苦を伴う災害の現場からのみ苦難の意味は理解し得ることを物語っている。

アーマール (災い) 骨の折れる労働としての災い

詩編10編7節 口に呪い、詐欺、搾取を満たし／舌に災い (עמל) と悪 (און) を隠す。

アーマールと結びついたアーヴェン (災い)

詩編90編10節 人生の年月は七十年程のもので。健やかな人が八十年を数えても／得るところは労苦 (עמל) と災い (און) にすぎません。瞬く間に時は過ぎ、わたしたちは飛び去ります。

男性名詞アーマールは動詞アマル「労働する」「骨の折れる仕事をする」から派生し、こちらも労苦としての災いを指す。それ故両語は結びつきやすいのである。上掲の詩編の2章句(詩10:7, 90:10)では同じ「アーマールとアーヴェン」(עמל ואון)の句が違う訳となっている。その理由は、前者では他者を害する行為を指すのに対して、後者では自らが担った重荷を指しているからであり、正当な訳し分けである。ただ、ヘンダイアディスとしての「アーマールとアーヴェン」の持つ厳しさは訳し分けによって減じられているかも知れない¹³。災害は人を選ばない。人は労苦から疲弊に至り、疲弊の様々な症状を呈する。その一つに悪の果実もある。その時、個人の資質だけの問題として片付けてよいのか？アーマールとアーヴェンの語はそのような問いを鋭く投げかけている。

c テラーアー (תלואה)

テラーアーはヘブライ語聖書に5回登場する。この5回のうち新共同訳は

13 「ヘンダイアディス」とは「二詞一意」と訳され、単語2つの意味の和を超えてより包括的概念を指し示すものである。特にヘブライ語においては、二番目の術語が最初の術語の形容詞である連結をいう。Cf. J. Bazak, "On the Meaning of the Pair mishpat usedaqah ("Justice and Righteousness") in the Bible," *Beth Mikra* 32 (109) (1987), pp. 143-144. つまりアーマール・ヴァー・アーヴェン (עמל ואון) は「アーヴェンなるアーマール」「アーヴェンへと至るようなアーマール」であり、悪事を含む疲弊にまで必ず到達してしまうような労苦の意味になる。

1 回を「苦難」と訳している。他の訳語からも苦難を表す術語の一つと言い得る¹⁴。

テラーアー (苦難) 疲れ果てた苛立ちとしての苦難

ネヘミヤ記 9 章32節 今この時／わたしたちの神よ／偉大にして力強く畏るべき神よ／忠実に契約を守られる神よ／アッシリアの王の時代から今日に至るまで／わたしたちが被った苦難 (תלאה) のすべてを／王も高官も祭司も預言者もわたしたちの先祖も／あなたの民の皆が被ったその〔苦難の〕すべてを／取るに足らないことと見なさないでください。このすべては起こるべくして起こったのです¹⁵。

テラーアーは動詞ラーアー「疲れ果てる」「いらいらする」から派生の女性名詞で疲労、困難を意味する。聖書では特に世界帝国に隷従を余儀なくされた民族の歴史的体験をこの語で象徴している。苦難の持つ共同性、歴史性と忍耐し難い不快さや疲弊といったからだ性とがテラーアーの語によって結び付けられている。

d カーシャー (קשה)

カーシャーはヘブライ語聖書に28回登場する。この28回のうち新共同訳は1回を「災難 (をもたらす)」と訳している¹⁶。「厳しい」の例外的意識と言える用法であるが、これも人間の許容範囲を超えたとの観点からこのグループに数え、章句を記すのみに留める。

14 新共同訳はテラーアーを残り4箇所で「困難」(出18:8)、「患難」(民20:14)、「欠乏」(哀3:5)、「煩わしいこと」(マラ1:13)と訳出している。

15 後半の「苦難」はヘブライ語本文に該当語はなく、意識である。

16 新共同訳はカーシャーを残りの箇所では例えば「難(産)であった」(創35:16)、「甚だしい」(創49:7)、「厳しくして(はならない)」(申15:18)等と訳出している。

カーシャー（災難） 厳しさとしての災難

サムエル記上 5章7節 アシユドの人々はこのを見て、言い合った。「イスラエルの神の箱を我々のうちにとどめて置いてはならない。この神の手は我々と我々の神ダゴンの上に災難をもたらす (השק)。」

B 災いの叫び（オーイ、アレライ、ハツ、ホーイ）

ここでは「災い」と訳されている4種の叫び声を扱う。

a オーイ (אוי)

オーイはヘブライ語聖書に24回登場する。この24回のうち新共同訳は18回を「災い」と訳している¹⁷。

オーイ（災い） 敗北の得心

イザヤ書 6章5節 わたしは言った。「災いだ (אוי)。わたしは滅ぼされる。わたしは汚れた唇の者。汚れた唇の民の中に住む者。しかも、わたしの目は／王なる万軍の主を仰ぎ見た。」

オーイは悲嘆と絶望の強烈な表現であり、後述のホーイと共に知恵的用語とされ、預言者によって審判の言葉を導入する定型句として効果的に用いられた¹⁸。オーイは戦争の文脈においては、敵軍の巨大なるを見て開戦を待たずに自国・自軍の敗北、自らを待つ残酷な運命を悟った時の言葉である（サ

17 新共同訳はオーイを残り6箇所「大変だ」(サム上4:7, エレ6:4), 「大変なことになった」(サム上4:8), 「不幸な者」(箴23:29), 「ああ」(エレ4:31, エゼ16:23) と訳出している。

18 オーイとホーイの比較研究については G. Wanke, "אוי and הוי" ZAW 78 (1966), pp. 215-218, 知恵的背景については J. W. Whedbee, *Isaiah and Wisdom* (Nashville: Abingdon Press, 1971), pp. 80-110 を参照。なおヴィルトベルガーは両語が知恵的術語であることは認めるが、このイザヤ書 6章5節のオーイに関しては知恵的背景を持たないと査定する。Cf. H. Wildberger, *Jesaja*; BKAT10/3 (Neukirchen-Vluyn: Neukirchener Verlag, 1982), 1624.

ム上4:7, 8, イザ24:16)。イザヤの召命(イザ6章)においても同様に、汚れた人間が聖潔すぎる神を見てしまったことによる死の自覚という宗教的敬虔以上のことが「オーイ・リー(私にオーイ!)」(אוֹיִי לִי)には込められている。つまり語るに落ちるで、それまでのイザヤが神と不可避的開戦に至る道を歩み続けていたことを露呈しているのである。勝ち組に属し南王国の構造改革を「ミシュパート(公正)とツェダカー(正義)」(מִשְׁפָּט וְצְדָקָה)と自負していたイザヤは、主の目においてそれが「ミスパハ(流血)とツェアカー(叫喚)」(מִשְׁפַּח וְצַעֲקָה)に満ちた異常な社会の姿であることを得心したのである。それは真の王は誰か、真にこの現実世界を支配しているのは誰かを知った瞬間でもあった。目から鱗が落ちた者には悔い改めの可能性が残されている。それ故「オーイ」は単なる断罪の死亡宣告には留まらない。真実に目覚めよ、神の支配を唯一の現実として選び直すべしとの招きも含まれているのである。罪赦された罪びととしての連帯が発する警句なのである。

b アレイ (אללי)

アレイはヘブライ語聖書に2回登場する。この2回のうち新共同訳は1回を「災い」と訳している¹⁹。

アレイ (災い) 泣き叫ぶしかない災い

ヨブ記10章15節 逆らおうものなら、わたしは災いを受け (אללי) / 正しくても、頭を上げることはできず / 辱めに飽き、苦しみを見えています。

アレイは泣き叫ぶ「災いなるかな」である。ヨブは神の執拗な告発に対して、もし秘めたる罪があるなら自分で自分に「アレイ!」と宣告しますと抗弁している。

19 新共同訳は残り1回のアレイを「悲しいかな」(ミカ7:1)と訳出している。

c ハツ (הַחַ) ²⁰

ハツはヘブライ語聖書に1回だけ登場し、新共同訳は「災い」と訳している。章句のみ記す。

ハツ (災い) 叫び声を伴う災い

エゼキエル書30章2節 「人の子よ、預言して言いなさい。主なる神はこう言われる。泣き叫べ、ああ、その日は災いだ (הַחַ)。

d ホーイ (הוֹי)

ホーイはヘブライ語聖書に51回登場する。この51回のうち新共同訳は40回を「災い」と訳している²¹。

ホーイ (災い) 期待された器の変容に対する哀悼

イザヤ書5章8節 災いだ (הוֹי), 家に家を連ね、畑に畑を加える者は。お前たちは余地を残さぬまでに／この地を独り占めにしている。

イザヤ書5章20節 災いだ (הוֹי), 悪 (רַע) を善と言い、善を悪 (רַע) とする者は。彼らは闇を光とし、光を闇とし／苦いものを甘いとし、甘いものを苦いとする。

イザヤ書31章1節 災いだ (הוֹי), 助けを求めてエジプトに下り／馬を支えとする者は。彼らは戦車の数が多く／騎兵の数がおびただしいことを頼りとし／イスラエルの聖なる方を仰がず／主を尋ね求めようとしない。

ホーイは不満や苦痛の表現で、恐らくは葬送の嘆きに起源を持つ。また知恵的術語とされる。オーイ同様に、預言者によって審判的恫喝の定型句とされた。神との関係性を喪失した死せる者に等しい、との威嚇に用いられる。

20 「ハー」 (הָ) [hā] の子音ヘーにマツピークが付いた形 (הַחַ) [hāh] のため読みは殆ど「ハツ」となる。

21 新共同訳はホーイを残し 7 箇所「なんと不幸なことよ」(列上 13:30), 「ああ」(イザ 29:1 他 5 箇所) と訳出している。しかし残り 4 箇所(ゼカ 2:10 他)は擬音とみなして訳出していない。

オーイとの違いに着目すれば、ホーイには相手に対する惜しむ気持ちがある。“なぜあなたがこんな最期を遂げねばならなかったのか”“どうしてこんな変わり果ててしまったのか”“残念でしようがない”というニュアンスがある(列上13:30)。つまりホーイに先立って、期待と選びと委託があったのである。預言者による災いの言葉は、ともすると義人から悪の陣営への痛罵のように響くが、その対象は悪人一般というよりは、神からの委託や期待を受けていた選ばれた存在であることを多くの文脈が示している。指導者層、知者、王、神の道具としてのアッシリア(イザ10:5)など。ホーイは叱責と哀悼の両義性を噛み締めつつ為される、関係性の中での言葉なのである。

オーイとホーイは神の霊を受けた預言者によって他者を仮借なく断罪する際の言葉と思われがちである。しかし実は深い内省と関係性を根拠に搾り出される叫びであることが明らかになった。この両語はそれ故、宗教者が自己を絶対化し、他者に災いを宣告する安易さを戒める機能を本来内包していると言えよう。

C 神が撃つ

(ネガア, ナーガフ, ネゲフ, マッゲーファー, ナーハー, マッカー)

今日災害を神の刑罰と捉えることは聖書本文自身によって批判的に吟味されねばならない。ここでは災害を天罰、神の審判と捉える発想に聖書的根拠を与えてきた「打つ」「強打する」の同義語3語根(נגע, נגף, נכה)から派生の6単語を取り上げる。

a ネガア (נגע)

ネガアはヘブライ語聖書に78回登場する。この78回のうち新共同訳は4回を「災い」と訳している²²。

ネガア(災い) 神意伝達の可能性

出エジプト記11章1節 主はモーセに言われた。「わたしは、なおもう一

22 新共同訳はネガアを残りの箇所では例えば「病気」(創 12:17)、「疫病」(詩 91:10)、「傷害」(申 17:8)等と訳出している。

つの災い (עָוָה) をファラオとエジプトにくだす。その後、王はあなたたちをここから去らせる。いや、そのときには、あなたたちを一人残らずここから追い出す。

名詞ネガアは動詞ナーガアから派生の男性名詞である。後述のナーガフ、ナーハーと共に打撃を意味するが、他の2つとは異なり動詞ナーガアの原意は「打つ」ではなく「触れる」である点に特色がある。出エジプト記7章から始まる一連の災いの記事において、ネガアは最後の災いを告知する場面に1回だけ用いられる。ネガア (動詞はナーガア) は神が主語の時、神意伝達という側面を持つ。聖なる方の接近は接触面に非常な緊張を引き起こし、人間側から見れば“神に打たれた”としか思えないものである (創12:17)。最後の災いにおいて「なおもう一つのネガア」と言っていることは、主は一貫して神意を伝えようとファラオに接近し続けていたことを暗示するかも知れない。

b ナーガフ (נָגַף), ネゲフ (נֶגֶף), マッゲーファー (מַגֵּפֶה)

動詞ナーガフとその派生語である男性名詞ネゲフ、女性名詞マッゲーファーをまとめて扱う。ナーガフはヘブライ語聖書に49回登場する。この49回のうち新共同訳は2回を「災い (を引き起こす / くだした)」と訳している²³。男性名詞ネゲフはヘブライ語聖書に7回全て単数形で登場する。この7回のうち新共同訳は1回を「災害」、3回を「災い」と訳している²⁴。ネゲフは神が撃ったしるしとしての災害と密接に関連する術語といえる。女性名詞マッゲーファーはヘブライ語聖書に26回登場する。この26回のうち新共同訳は8回を「災害」、2回を「災い」、1回を「災難」と訳している²⁵。

23 新共同訳はナーガフを残りの箇所では例えば「打ち」(出 21:22), 「つまずく」(エレ 13:16), 「倒す」(詩 89:24), 「惨敗し」(列下 14:12) 等と訳出している。

24 新共同訳はネゲフを残り3箇所「疫病」(民 17:11, 12), 「つまずき」(イザ 8:14) と訳出している。

25 新共同訳はマッゲーファーを残り15箇所「災厄」(サム上 6:4), 「疫病」(民 14:37 他 13箇所) と訳出している。

ナーガフ（災い） 波を起こすための一撃

出エジプト記7章27節 もしあなたが去らせることを拒むならば、わたしはあなたの領土全体に蛙の災いを引き起こす (רָגַף)。

まず最も基本的な動詞から考察に入る。27節後半部は直訳すれば「かの蛙たちで以てあなたの国境全てをナーガフしている」となる。動詞ナーガフによる災害は特に、標的を殴るという意味の打撃であるというよりも、むしろ「打つ」ことによる波紋の広がり、波及、蔓延、汚染と関係している。また、被造物が用いられることが多いのも特徴である。

マッゲーファー（災い）とネゲフ（災害）の比較 波と波 現象と原理

民数記31章16節 ペオルの事件は、この女たちがバラムに唆され、イスラエルの人々を主に背かせて引き起こしたもので、そのために、主の共同体に災い (מַגֵּפָה) がくだったのではないか。

ヨシュア記22章17節 かつてペオルで犯したあの罪は、我々にとってささいなことであつたらうか。あのとき、主の共同体に災害 (רָגַף) がくだり、今日に至ってもまだ清められていないではないか。

バアル宗教傾倒の罪により蔓延した災害（疫病とみられる）の並行記事から、同じ事件を指しているマッゲーファー（民31：16）とネゲフ（ヨシ22：17）の両語は互いに交換可能と分かる。前項の動詞ナーガフで確認した通り、ここには、偶像礼拝と疫病という、伝染・浸透する二つの波の対立と相殺が描かれている。人間が起こした第一の波を打ち消すための第二の波としての神のネゲフ／マッゲーファー共通の機能が窺える。

共通の機能を確認したところで、両語の差異を見出すことは出来るだろうか。資料毎に術語を使い分けているわけではない。辞書的には、マッゲーファーは複数形を持つのに対し、ネゲフは単数形でしか聖書に登場しない点

で違いがあるが、ここでは共に単数である。更に文脈をみると、民数記版はモーセが直近の事件として引用叱責しているのに対し、ヨシユア記版はヨシユアが時間の経過した過去の事件として想起している。そこから、ネゲフは主の怒りという原理的側面（単数形）、マッゲーフアーは実際に起こった現象的側面（複数形を持ち得る）をそれぞれ担当しているのだろうか。

ネゲフ（災い）とマッゲーフアー（災難）の比較 神の業と人間の解釈

出エジプト記30章12節 あなたがイスラエルの人々の人口を調査して、彼らを登録させるとき、登録に際して、各自は命の代償を主に支払わねばならない。登録することによって彼らに災い（**נֶגֶף**）がふりかからぬためである。

歴代誌上21章17節 ダビデは神に言った。「民を数えることを命じたのはわたしではありませんか。罪を犯し、悪を行った（**רָעָה**）のはこのわたしです。この羊の群れが何をしたのでしょうか。わたしの神、主よ、どうか御手がわたしとわたしの父の家に下りますように。あなたの民を災難（**מַגֵּפָה**）に遭わせないでください。」

ダビデによる人口調査の罪に対する罰としての三日間の疫病だが、歴代誌上21章全体において、神の台詞及び物語ではマッゲーフアーではなくデベル「疫病」（**דֶּבֶר**）（歴上21：12, 14）の語が用いられている。対してダビデの台詞（同21：17）中だけマッゲーフアーとなっている。出エジプト記30章12節と比較するなら、疫病を、神のネゲフが顕在化した事態として受け止める時、それはマッゲーフアーと呼ばれているのが分かる。

マッゲーフアー（災害） 神の力の証明としての複数形の災害

出エジプト記9章14節 今度こそ、わたしはあなた自身とあなたの家臣とあなたの民に、あらゆる災害（**מַגֵּפָה**）をくだす。わたしのような神は、地上のどこにもいないことを、あなたに分からせるためである。

「あらゆる災害をくだす」とある本文は「私の複数のマッゲーファーの全てを派遣する」であり、被造物を用いてエジプト社会へ波及蔓延させる災い全般が言われている。この14節は後半から、出エジプトに至る一連の災いは、ファラオと主との“どちらが真の神か”をめぐる勝負であったことを示し、前半からマッゲーファーが勝負の具体的指標であることを物語る。つまり、“どちらの神の繰り出すマッゲーファーの方が波及力、伝染力において上か”をめぐる競い合いだったのである。もちろん出エジプト記において排他的に主のみわざと位置づけられるマッゲーファーという術語の主語にファラオが来ることはない。しかし、主が度重なるネゲフとマッゲーファーの果てにエジプトの民に挙げさせた「大いなる叫び」(出12:30)と「追い使う者のゆえに叫ぶ彼らの叫び声を聞き、その痛みを知った」(出3:7)には同じツェアーカー「叫び」(קִרְעָה)の語が使われている。ファラオも現人神として何らかの波を奴隷たちにぶつけていたのである。それ故、出エジプト記における神の災害は、ファラオはエジプトにどのような波を起こして来たのか、いかなる甘受を波及させ、いかなる無責任を伝染させ、いかなる諦観を蔓延させてきたかの検証へと私たちを向かわせる機能を持っている。

c ナーハー (נכה), マッカー (מכה)

動詞ナーハーとその派生語である女性名詞マッカーの同語根2語をまとめて扱う。動詞ナーハーはヘブライ語聖書に513回登場する。この513回のうち新共同訳は1回を「災い(を下す)」と訳している²⁶。「打つ」「(主が)撃たれた」の極めて例外的な意識である。女性名詞マッカーはヘブライ語聖書に44回登場する。この44回のうち新共同訳は4回を「災害」、2回を「災い」と訳している²⁷。「傷」「打撃」「疫病」の例外的意識である。

26 新共同訳はナーハーを残りの箇所では例えば「打っている」(出2:11)、「打ち殺して」(出2:12)、「殴る」(出2:13)、「撃った」(イザ27:7)等と訳出している。

27 新共同訳はマッカーを残りの箇所では例えば「疫病」(民11:33)、「打撃」(サム上4:10)、「傷」(イザ1:6)等と訳出している。

マッカー（災い）とナーハー（災い） 野獣の横行と戦争としての災い

レビ記26章21節　それでも、まだわたしに反抗し、わたしの言葉を聞こうとしないならば、あなたたちの罪に七倍の災い（מכה）を加える。

レビ記26章24節　わたしもまた、あなたたちに立ち向かい、あなたたちの罪に七倍の災いをくだす（נכה）。

レビ記と申命記には呪いと結びついた災いのモチーフが登場する。レビ記の「不服従への呪い」（レビ26：14-39）は、民の不服従と神の審判が6段階にエスカレートする構造になっている。マッカーは第3の呪い（21-22節）において飢えた野獣の横行を指し、ナーハーは第4の呪い（23-26節）において戦争と町の陥落を指している。

マッカー（災害） 律法の呪いとしての大災害

申命記28章59節　主はあなたとあなたの子孫に激しい災害（מכהが2回）をくだされる。災害（מכה）は大きく、久しく続き、病気も重く、久しく続く²⁸。

申命記の「祝福と呪い」でも律法を守らない際の呪いの徹底が3重のマッカーによって強調されている（申28：59）。神に聞くことを拒んだことの帰結としての災害が予告されている典型的な神罰の根拠的章句である。

マッカー（災い） 強者への災いは弱者の解放と保護をもたらす

サムエル記上4章8節　大変なことになった（אוי）。あの強力な神の手から我々を救える者があるか。あの神は荒れ野でさまざまな災い（מכה）を与えてエジプトを撃った（נכה）神だ。

28 本文は「主はあなたのマッカー（複数）を、そしてあなたの子孫のマッカー（複数）をくだされる。マッカー（複数）は大きく…」と3個のマッカーが使われている。

一方、サムエル記ではイスラエルを解放するために神がエジプトに下した一連の災いがマッカーで総称されている。そこには神の打撃の持つ解放と守護という側面が見てとれる。

D 悪（ラア、ラーアー、ラーアア）

「悪」を意味する男性名詞ラアは創世記2-3章の「善悪の知識の木」（直訳すれば「かの知識“トープ&ラア”の木」）に象徴的なように、善（トープ）と対になる概念である。ここでは災害が悪そのものの術語で表されているケースとして、男性名詞ラア（形容詞含む）、女性名詞ラーアー、名詞から派生の動詞ラーアアの同語根3語をまとめて考察する。

a ラア（עַר）

ラアはヘブライ語聖書に分類困難な男性名詞203回と形容詞142回で計345回登場する²⁹。このうち新共同訳は37回（男性名詞31回と形容詞6回）を「災い」と、男性名詞2回を「災難」と、男性名詞1回を「苦難」と訳している³⁰。

ラア（災い） 災いを創造する神 二元論を超えて

イザヤ書45章7節 光を造り、闇を創造し（ברא）／平和をもたらし、災い（עַר）を創造する（ברא）者。わたしが主、これらのごことをするものである。

「闇」も「災い」も主が創造したものと宣言するこの章句は、捕囚地で接触した二元論的世界観への神学的反論とも、イスラエル宗教のより古い考え方

29 ラアは形容詞と男性名詞と動詞完了形が同形のため、解釈により計数が異なる。Even-Shoshan, (ed.) *A New Concordance of the Old Testament*, pp. 1080-1081 では形容詞 142 回、男性名詞 203 回、計 346 回であるが、BDB, pp. 948-949 では形容詞 226 回、男性名詞 126 回、計 352 回となる。

30 新共同訳はラアを残りの箇所では例えば「悪」（創2:9）、「苦境」（出5:19）と訳出している。

を保存している可能性があるともされる章句である³¹。ラアは倫理的な「悪」と社会的・政治的な「災い」の意味を包含する語であるが、ここではトープ「善」の語は登場せず、倫理的射程を持たないシャーローム「平和」と対比されているので、「災い」と訳される³²。

この困難な章句の存在は、ヘブライ語聖書におけるラアを、善悪二元論的図式一辺倒で把握することは正当ではないことを物語っている。善悪二元論においては、善と悪は敵対的に真逆の方向性を持つものとして正負両極の如く位置づけられる。原点に対して+100の方向に善があり、-100の方向に悪がある。神話的に例えるなら、善の側には神がいて義人を導き、悪の側には悪魔がいて悪人を誘う図が想起されよう。しかし、こうした二元論的発想は聖書においては比較的新しく、王国滅亡、捕囚、帰還後の隷属的状态の中で、ペルシア的な二元論が受容されたものである。それ以前の信仰はより素朴な形態であり、全てのものは神から出て神へと向うという単純なものであった。そこにおいては神と並び立つ敵対者としての悪魔もいなければ、そもそも神とは真逆の方向自体が存在し得ないことは言うまでもない。本来のトープとラアの関係はそれ故、同一方向における完全さと不完全さの違いでしかない。例えるなら+100がトープであり、+75がラアである。トープとは“よいこと”で、“よくないこと”がラアである。トープは“幸せ”で、“幸せでないこと”がラアである。つまりラアとは“トープでないこと”、“トープであることに失敗している状態”であって、トープとは真逆の方向への叛逆の歩みでは決してない。こうした世界観の下では、悪や災いの原因は、ラアを志向する邪悪な者がいるからだとはなり得ない。悪をはびこらせているのもやはりトー

31 W. H. シュミット(山我哲雄訳)『歴史における旧約聖書の信仰』(新地書房、1985)、158、527-530頁参照。

32 この立場によればラアはイスラエル民族が体験した歴史上の苦難であり、「災いを創造する」とはそれらに主が責任を負っていることを指す。Cf. K. Elliger, *Deuterocesaja*; BKAT11/1 (Neukirchen-Vluyn: Neukirchener Verlag, 1978), p. 500, U. Berges, *Jesaja 40-48*; HThKAT (Freiburg: Herder, 2008), p. 406. これに対してヴェスターマンは「神が悪と災いを創造される」とラアを包括的に理解する。C. ヴェスターマン(頓所正・山本尚子訳)『イザヤ書-私訳と註解-(40-66章) ATD 旧約聖書註解19』(ATD・NTD 聖書註解刊行会、1997)、274頁参照。

ブを志向している人々なのである。自分がトープ（幸い）になるために他人にラア（災い）役を押し付けることの連鎖、それこそが悪の蔓延であり、災いの状態なのである。それ故、聖書においてラアの問題は、個人の内心における邪悪な選び取りの問題に解消してはならず、社会的広がりの中での関係概念における問題として捉える必要があるのである。

闇を敵とは見ない神のモチーフは創世記1章とも響き合う。論者は先に創世記1章の動詞バーラー「創造する」（ברא）をめぐって、“甚だしい窒息・混濁状態にあるものを解きほぐして救う”射程を持つ可能性について考察を試みた³³。そのバーラーの「創造する」と「解きほぐして救う」という両義性に照らして、本章句に二通りの解釈が可能となる。先ず、新共同訳の通りに読む。「災い」も主が創造したものである。私たちはこの不条理に踏みとどまる必要がある。その上で「光を造り、闇を解きほぐして救い（ברא）／平和をもたらし、災い（רע）を解きほぐして救う（ברא）者。わたしが主、これらのことをするものである。」と読む。そこには、災害の現場に身を置き続ける神を発見することが出来よう³⁴。

ラア（災い） トープとの関連で見えてくるもの

詩編23編4節 死の陰の谷を行くときも／わたしは災い（רע）を恐れない。あなたがわたしと共にいてくださる。あなたの鞭、あなたの杖／それがわたしを力づける。

有名な詩編23編の「わたしは災いを恐れない」は、一見すると、「死の陰の谷」との連想で、死と直結した危険としての災いが、牧者なる主の伴いによって完全に排除されている安心が語られているようにも映るが、「死の陰の谷」は本文では「暗黒の谷」の意味であり、死とは無関係である³⁵。「災い」にあ

33 解きほぐして救うバーラーの射程については拙論「ヘブライ語聖書における被造物の福音—『ある人』（創2：20b）と『かの人』（同1：27）をめぐる間テクスト的黙想」『西南学院大学神学論集』第70巻第1号（2013.3），1-49頁参照。

34 同上，32-40頁参照。

35 松田伊作訳『旧約聖書XI 詩篇』（岩波書店，1998），56頁参照。

たるヘブライ語も本項で扱うラアであり、正しく後続6節「命のある限り／恵み(טוב)と慈しみはいつもわたしを追う。」のトーブと対応している。トーブとの対照で語られるラアは根絶・排除の対象というよりも、慎重に対処すべき現実である。「ラアを恐れない」とは、ラアの圧倒的力をあたかも畏怖の対象の如く看做さないということであり、等身大の現実として取り組んでいく成熟さの表れといえる。ここには、闇をも悪をも敵とは看做さない、創造の神との反響が認められる。

ラア(苦難) レシャアとの関係で見えてくるもの

詩編94編13節 その人は苦難(צרה)の襲うときにも静かに待ちます。
神に逆らう者には、滅びの穴が掘られています。

報復の神に祈る詩編94編には13節に「苦難」が登場するが、ここは新共同訳がラアに対して「苦難」の訳語を充てた唯一の箇所である。ここではトーブとの結びつきはなく、ラアは「邪悪」「神に逆らう者」を意味する類義語レシャア(רשע)と近接している。「苦難の襲うときにも」の本文は「ラアの日々から」(מימי רע)であり、社会的倫理的悪の跋扈する時代に律法を学ぶ義人が蒙る耐え難さが苦難と呼ばれている。

ラア(災い) 社会構造の中で捉えるべき災い

ハバクク書2章9節 災いだ(הוי), 自分の家に災い(רע)を招くまで／
不当な利益をむさぼり／災い(רע)の手から逃れる
ために／高い所に巢を構える者よ。

物質的繁栄に満たされた幸福な人生を追求し、その利益優先の結果起こる災いから主犯たる自分だけ安全地帯に逃れようとしている図である。自分がトーブ(幸福)になることと、他人がラア(幸福を享受することが不可能)になることが連関している。聖書のトーブとラアにはこうした社会的関係概念が含まれており、個人の内心の善悪の問題だけに収斂させてはならないこ

とが確認されよう。

ラア (災難) トーブの欠如としての災難

箴言19章23節 主を畏れば命を得る。満ち足りて眠りにつき／災難
(עָרָ) に襲われることはない。

この格言にトーブは登場しないが、命を得、満ち足りて眠りにつくことはまさしくトーブに相当する。これらの獲得に失敗している状態こそラアの示す災難なのである。

b ラーアー (רָעָה)

ラーアーはヘブライ語聖書に319回登場する。この319回のうち新共同訳は2回を「災害」、129回を「災い」、21回を「災難」、7回を「苦難」とそれぞれ訳している³⁶。4つの訳語全てを包含している唯一の名詞である。

ラーアー (災害) 巨大災害は人を選ばない

創世記19章19節 あなたは僕に目を留め、慈しみを豊かに示し、命を救おうとさせていただきます。しかし、わたしは山まで逃げ延びることはできません。恐らく、災害 (רָעָה) に巻き込まれて、死んでしまうでしょう。

女性名詞ラーアーは男性名詞ラアの具体的側面を意味する。ラーアーの語が悪、災害、災い、災難、不幸、損害、悲惨、苦痛、苦惱他と幅広い訳を持つのはそのためである。国に対して神が下す刑罰的災害としてのラーアーの用例もあり、軍事的攻撃とその被害 (列下8:12他) を指すことも多い。

ソドムとゴモラの悪に対する神の刑罰としての自然災害が、ロトによってラーアーで表現されている。同時に命を保つことに失敗する不幸も含意され

36 新共同訳はラーアーを残りの箇所では例えば「苦しみ」(コヘ 12:1)、「危害」(民 35:23)、「悪事」(コヘ 8:11)、「悪」(エレ 18:8a)、「悪(者)」(箴 24:1) 等と訳出している。

ている。

ラーアー（災い） 他者に犠牲が集中する不条理としての災い

歴代誌上21章15節 神は御使いをエルサレムに遣わし、これを滅ぼしてしまおうとされたが、御使いが滅ぼそうとするのを主は御覧になり、この災い（**רעה**）を思い返され、滅ぼそうとする御使いに言われた。「もう十分だ。その手を下ろせ。」主の御使いはエブス人オルナンの麦打ち場に立っていた。

マッゲーファーの項で述べた通り、ダビデの人口調査事件における災いは「疫病」そのものにはデベルが、ダビデ自身の解釈としての「災難」にはマッゲーファー（歴上21：17）の語がそれぞれ使われていた。しかしこの15節では神から見た同じ「災い」にラーアーの語が用いられている。この物語でラーアーの語はこの15節にだけ登場する。「災いを思い直す」という定型表現に過ぎないことを踏まえた上で、敢えて文脈上の理由を問うなら、直前14節「イスラエル人のうち七万人が倒れた」という死者数の報告が考えられよう。本来罰を受けるべきダビデ当人は救われて、民7万人が死んだという不条理には、自分がトープになるために他者をラアにするというラーアーの射程が良く合致するのである。

ラーアー（災い） 悪と災い

ヨナ書3章10節 神は彼らの業、彼らが悪（**רעה**）の道を離れたことを御覧になり、思い直され、宣告した災い（**רעה**）をくだすのをやめられた。

同節中にラーアーが2個、別々の訳で登場している箇所である。ニネベの悪業と、神の審判的災害が同じ「かの（冠詞付）ラーアー」で表裏の関係にあることを示している。主はニネベを滅ぼすという災い「かのラーアー」を

撤回した。預言者ヨナはこれに腹を立て、以下の重要な章句に続く。

ラーアー（災い） 災いを思い直す神は他者をトープにする

ヨナ書 4章 2節 彼は、主に訴えた。「ああ、主よ、わたしがまだ国にいましたとき、言ったとおりでありませんか。だから、わたしは先にタルシシュに向かって逃げたのです。わたしには、こうなることが分かっていました。あなたは、恵みと憐れみの神であり、忍耐深く、慈しみに富み、災い（רעה）をくだそうとしても思い直される方です。

神は災いを下す主体であると同時に、災いを下そうとしても思い直す自由さを持っている。ヨナは出エジプト記34章6節の神顕現における主の5つの属性を引用しつつ、預言が成就しなかったことへの皮肉も込めて「災いを下そうとしても思い直す」のフレーズを付け加えている。災いの撤回の根拠は、神が憐れみと恵み（רחום וחנון）、慈しきとまこと（חסד ואמת）に満ちており、この二重のヘンダイアデイスによって強固に囲まれた忍耐深さを持っているからである。この後、4章で二度、怒り続けるヨナに対して主は同じ問いを繰り返す。「お前は怒るが、それは正しいことか」（ヨナ4:4, 9）³⁷。ここにも、トープとラアの相克が、“他者をトープにすることと、他者をラアにすることと、どちらが大切なのか”という問いの形で浮かび上がって来る³⁸。ヨ

37 但し9節では4節の言葉に更に「とうごまの木のことで」が加わっている。

38 ハヘーテブ「正しいことか」（ההיטב）はヘー疑問形+動詞ヤータブ「よくなる」（יטב）のヒフィル形不定詞独立形である。「お前は怒るが、それは正しいことか」を鈴木佳秀訳『旧約聖書X 十二小預言書』（岩波書店、1999）、142頁は「あなたが怒りに燃えるのは正しいことなのか」と訳し、旧約聖書ヘブライ語辞書 BDB, p. 406では副詞的に「あなたは正しく怒っているのか」と読む。語根（יטב）におけるトープ（טוב）との親近性を意識し、ヒフィル形（使役）の語形を活かして、直訳すれば「他者をトープにすること〔になるというの〕か、怒りは、お前にとって」とも訳し得る。ヨナの怒りの正当性を巡る問答の背後に、他者の命を神の支配に導き入れるために何をすべきかという聖書神学的黙想の課題が確認できるのである。

ナ書における「災害」(ラーアー)は2つの点を教えてくれる。人間の行いに応じて、神が災いを下すということ。しかし神の最大関心事はラアをトーブにすることであって、災いの貫徹にはないということ。それ故、ラーアーの語は、機械仕掛けの復讐装置のように刑罰を下す神を、固定的不変的にイメージする信仰的態度に対して是正を迫る機能を持っていると言える。

ラーアー (災難) 二元論的幸福追求の不可能性としての災難

箴言17章13節 悪(רעה)をもって善(טובה)に報いるなら/家から災難(רעה)は絶えない。

ラーアーが「災難」と訳されている21件から1例だけ紹介する。短い知恵的格言の中で、男性名詞ラアでも確認したトーブとの関係性、悪と災いの二側面が明確に表現されている。女性名詞トバーはトーブの具体的可視的諸表象を包含するので、ここで描写されているのは品性や心根の問題ではなく、現実生活における具体的行動や選択の総体である。そして、自分の生活圏にトーブの具体的諸要素(豊かさ、繁栄、安全、善)を集中・独占させ、他者の生活圏にラアの具体的諸要素(それらの欠乏)を押し付けるという歩みによっては、決してラアの根絶されたトーブのみの楽園生活を満喫することは出来ないという真理を鋭く宿している。

ラーアー (苦難) 報復の神による正義の回復

詩編94編23節 彼らの悪(און)に報い/苦難(רעה)をもたらず彼らを滅ぼし尽くしてください。わたしたちの神、主よ/彼らを滅ぼし尽くしてください。

詩人の敵「彼ら」は16節で「災いをもたらす者」「悪を行う者」と呼ばれる。「災いをもたらす者」はメレーイーム「他者をラアになるように仕向けている者達」(מרעים)であり、「悪を行う者」はポーアレー・アーヴェン「アーヴェンを作り出している者たち」(פעלי און)の意味である。同じ語根がここ

で現れているのが分かる。つまり詩人が神に祈る報復とは、彼らが他人に押し付けようとしたアーヴェンとラーアーを張本人の許へ返すことである。それはとりもなおさず、現実にはそうになっていなかったことを物語る。常態化していた社会風景は、ある人々がアーヴェン（邪悪）を作り出すのだが、実際そのアーヴェン（疲労困憊の災害）を味わうのは別の人々という不平等であり、ある人々がラーアー（悪）を企てるが、いつもそのラーアー（苦難）によって滅びるのは別の人々という不公正であった。「滅ぼし尽くす」は直訳すれば「完全に沈黙させる」ことである。他者の絶滅を進行させながら、「彼ら」が誰よりも大きな声で発言していたことを窺がわせる。

c. ラーアア (רעע)

ラーアアはヘブライ語聖書に93回登場する。この93回のうち新共同訳は18回を「災い（をくだす）」と訳している³⁹。

ラーアア（災い） 他者をラアになるように仕向ける

出エジプト記5章22節 モーセは主のもとに帰って、訴えた。「わが主よ。
あなたはなぜ、この民に災いをくだされる (רעע) の
ですか。わたしを遣わされたのは、一体なぜですか。

動詞ラーアアは名詞ラア／ラーアーからの派生語「ラアである／ラアになる」である。ヒフィル（使役）形は字義通りには「他者をラアになるよう仕向ける」であり、社会的関係概念としての悪の伝播、連鎖を射程に持つ。出エジプト記4章では藁なしで煉瓦を作るという過酷なノルマが21節で奴隷たちにラア（新共同訳「苦境」）と認識されたのを受けて、本節でヒフィル形「民をラアにならせる」が用いられている。ここにも、ファラオがトープを享受し続けるために奴隷たちがラアになることを強いられている社会構造が

39 新共同訳はラーアアを残りの箇所では例えば「乱暴なことはし（ないで）」（創19：7）、「痛い目に遭わせてやる」（創19：9）、「不満であり」（ヨナ4：1）、「ふさぎこんでいる」（サム上1：8）、「不幸を負った」（詩106：32）、「悪と映った」（イザ59：15）、「（災いが）ふりかかる」（箴11：15）、「害を加え」（イザ11：9）、「悪を行う」（エレ4：22）等と訳出している。

見てとれる。

E 苦難 (ムーツァーク, ツァーラル, ツアル, ツァーラー, メーツァル)

ここでは「苦難」について2語根5単語を扱う。

a ムーツァーク (מוֹצָאק)

ムーツァークはヘブライ語聖書に3回登場する。この3回のうち新共同訳は1回を「苦難」と訳している⁴⁰。ムーツァークは動詞ツーク (צוק) 「無理強いする」「窮乏へと追いやる」「鑄型に押し込み圧迫する」からの派生であり、他者による強制、不自由な狭さ、自分ではないものへと変形させられていくといった苦難の持つ被害性、不当性が含意された語である。新共同訳はヨブ記に「苦難」の訳語を4回(ヨブ5:19, 36:16, 16, 19)用いているが、ムーツァークは36章16節にツアルと共に登場するので章句解説は次項にて行う。

b ツァーラル (צָרַר), ツアル (צָר), ツァーラー (צָרָה), メーツァル (מִצָּר)

ここでは動詞ツァーラル語根の4単語をまとめて考察する。動詞ツァーラルはヘブライ語聖書に27回登場する。この27回のうち新共同訳は1回を「災難」と訳している⁴¹。男性名詞ツアルはヘブライ語聖書に約41回登場する⁴²。このうち新共同訳は3回を「災い」、17回を「苦難」と訳している⁴³。女性名詞ツァーラーはヘブライ語聖書に72回登場する。この72回のうち新共同訳は

40 新共同訳はムーツァークを残りの2箇所「苦悩」(イザ8:23)、「凍って固まる」(ヨブ36:16)と訳出している。

41 新共同訳はツァーラルを残りの箇所では例えば「攻め囲み」(申28:52)、「封鎖する」(列上8:37)、「苦しみに遭わせ」(ゼファ1:17)等と訳出している。

42 ツアルは「苦難」の他に同形異義語として「敵」があり、Even-Shoshan, (ed.) *A New Concordance of the Old Testament*, 994では「苦難」41回、「敵」74回の計上となる。しかし章句によっては、どちらに寄せるべきか解釈によって流動的であり、例えば、ショシャンは「敵」に計上しているもので、新共同訳が「苦難」の意味に取っている章句が2箇所(ヨブ36:16, 詩32:7)存在する。

43 新共同訳はツアルを残りの箇所では例えば「苦しみの時」(申4:30)、「苦悶」(ヨブ7:11)、「苦しみ」(ヨブ15:24)等と訳出している。

4回を「災い」、38回を「苦難」と訳している⁴⁴。男性名詞メーツァルはヘブライ語聖書に3回登場する。この3回のうち新共同訳は2回を「苦難」と訳している⁴⁵。

ツァーラル（災難） 結びつくことによる縛りとしての災難

歴代誌下28章22節 このアハズ王は、災難（צרה）のさなかでも、なお主に背いた。

動詞ツァーラルは「縛る」「結ぶ」「拘束する」を意味し、ヒフィル形で「狭くする」「抑圧する」「苦難を引き起こす」になる。歴代誌下28章では外国の脅威から自国を守るため大国アッシリアと軍事同盟を結んだアハズ王が自縄自縛に陥っていく様が、ツァーラルのヒフィル形を二回繰り返すことによって活写されている。「アッシリアの王ティグラト・ピレセルはアハズを援助するどころか、攻めて来て、彼を苦しめた（צרה）」（歴下28：20）アハズは更にアッシリア王に財産の一部を差し出すことになる。それらを受けて本22節で「災難（צרה）のさなかでも」（20節に合わせるなら「彼を苦しめることの時の中でも」と続くのである。歴代誌では外患の中で主に立ち返る王の姿が繰り返されるので、この局面で更に主に背くアハズの行動がこの句によって強調されていると言われる⁴⁶。唯一の結びつくべき相手として主を見出さなかった点にアハズの災難は起因していたのである。一回だけ「災難」と訳された動詞ツァーラルの用例は、“誰と結びつくべきか、その決断によって引き受けるべき苦難が規定される”という現実を人間に対して問いかける機能を有している。

次にヨブ記で「苦難」の訳語の登場する3章句をまとめて取り上げる。前項のムーツァークもここで考察される。

44 新共同訳はツァーラーを残りの箇所では例えば「苦しみ」（創42：21）、「苦境」（士10：14）、「悩み」（詩31：8）等と訳出している。

45 新共同訳はメーツァルを残り1箇所では「脅威」（詩116：3）と訳している。

46 池田裕訳『旧約聖書XV 歴代誌』（岩波書店、2001）、329頁の注二参照。

ツァラー (苦難) とラア (災い) 結びつくことによる縛りとしての苦難
 ヨブ記5章19節 六度苦難 (צרה) が襲っても、あなたを救い／七度襲っても／災い (רע) があなたに触れ (נגע) ないようにしてください。

新共同訳においてヨブ記最初の「苦難」の語はエリファズの第一回弁論中に登場する⁴⁷。エリファズによれば度重なるヨブの苦難は神からの懲らしめ（悪を内部から追い出す愛の鞭）であり、義人ヨブの幸いである⁴⁸。しかし秘めたる罪を前提としており、ヨブはこれには納得できない。

ここでは女性名詞ツァラーが複数形で用いられている。対論の序盤であり、一般的な応報思想の教示として現実の様々な具体的事象を聞き手にイメージしてもらうためであろう。

ツアル (苦難) とムーツァーク (苦難) 解放されるべき苦難

ヨブ記36章16節 神はあなたにも／苦難 (צר) の中から出ようとする気持を与え／苦難 (מוצק) に代えて広い所でくつろがせ／あなたのために食卓を整え／豊かな食べ物を備えてくださるのだ。

ヨブの長い独白 (29-31章) と神の弁論 (38章以下) の間に位置するエリファズの弁論 (32-37章) は後代の加筆とされるが、ここに残り3個の「苦難」の語が登場する。36章16節には前述のように二つの男性名詞ツアルとムーツァークが並存している。「苦難の中から」は「ツアルの口から」であり、ヨ

47 ヘブライ語聖書本文においてヨブ記にツアルが何回登場するかについては、既述の通り同音異義語「苦難」「敵」の解釈によって様々である。例えばショジャンのコンコルダンスではヨブ記における「苦難」ツアルは6回 (7:11, 15:24, 24:10, 36:19, 38:23, 41:7) であり、新共同訳が「苦難」と訳した36章16節のツアルは「敵」の項に計上されている。

48 並木浩一・勝村弘也訳『旧約聖書XII ヨブ記 箴言』(岩波書店, 2004), 19-20頁の注十一参照。

ブが現在ツアルの口の中に閉じ込められていることを物語る。「苦難に代えて広いところ」は「広い所、ムーツァークではない (לא־מוצק), それに代えて」なので、ツアルの口の中の狭さがムーツァークで表現されている。ツアルの具体的内容は、後続18節に「気持ちをあたえ」と同じ動詞（スートのヒフィル形）が使われていることから、怒りに唆されて神を訴追していることを指している。エリフはヨブに神への抗弁や訴追を止めるよう勧めている。この文脈の中で、この二語はどのような意味を持つだろうか。まず、ムーツァークは先述のように外圧によって故なく追い立てられ、狭い不自由な境遇に置かれ、本来の自分ではない別の鋳型で変形させられる苦痛と関係した語である。そこから、エリフは三友人のようにヨブに隠れた罪があるとは思っていないこと、ヨブ本人に全くあずかり知らぬ所でなされた他者の取り決めに従って悲惨な境遇にあることを承認している。それ故ムーツァークは、否定辞ローとマケッフで連結され (לא־מוצק), 消滅しなければならない理不尽な苦難として位置づけられ、広いところ、つまりヨブの名誉と境遇が完全に回復されなければならないことを暗示している。ヨブは本来その救いをもたらす唯一者である神とこそ結びつかねばならない。しかし現在は怒りと結びつき、神を訴追するという目的に縛られてしまっている。この的外れの結びつきに伴う縛りによる苦難が「ツアル」と呼ばれているのである。この用例から、苦難にも、引き受けねばならない、担うに値する苦難と、一刻も早く解放されねばならない、我慢してはいけない苦難とがあることが分かる⁴⁹。

ツアル (苦難) アイデンティティとしての苦難

ヨブ記36章19節 苦難 (רצ) を経なければ、どんなに叫んでも／力を尽くしても、それは役に立たない。

新共同訳ヨブ記において「苦難」の訳語が最後に登場するのは、エリフが

49 なおこのツアルには既述のように同形異義語「敵」があり、本節を「敵の口から」と解するシヨジャンのコンコルダンスに見られるような立場もある。しかし本文釈義から「苦難」の語義を持つツアルと看做す方が正当と考える。

苦難の意義を語る場面である⁵⁰。繰り返すが、男性名詞ツアルは動詞ツァール「縛る、結びつける」から派生した名詞「苦難」である。契約や関係を結ぶとそれまで守る必要のなかった制約などが生まれ、行動様式が制限される。そこで生じる苦悩や苦痛がツアルである。それ故ツアルとしての苦難は両義的なものである。自らの意思でその関係に入った場合は、主体的に引き受け、忍耐し続けるべき苦難もあるであろう。一方、強制的に縛り付けられた場合はこの限りではなく、苦難は被害、災難であり、一刻も早いそこから脱却が求められるべきものである。ツアルには実存と不可分になった、アイデンティティそのものともいうべき苦難と、不当な災難としての苦難がある⁵¹。前項で考察した36章16節のツアルは（ヨブにとってははともかく、）エリフにとっては後者の、ヨブが引き受け続ける筋合いのない（被害に近い意味での）苦難であったと言える。対して、この19節においては前者の苦難について語られている。「苦難を経なければ」にあたる本文は「「苦難の只中で」ではないなら」（לא בצר）であり、一過性の教育的季節としての苦難の意味づけ以上のことが言われている。むしろ、人間の实存と不可分の苦難が問題となっているように思われる。36章がヨブ記全体の中で持っている文脈において見れば、ヨブは長い長い神への叫びを続けているにもかかわらず、神が未だ返答していないことに納得できないでいた。16節においてエリフはヨブが不当な苦難に置かれている被害者であることを確証していた。しかしここ19節でエリフはヨブに直言している。叫びが聞かれないのは当たり前ではないか、それはお前が「苦難の只中で」ではない存在として叫んでいるからだ、と。それ故、16節の「ツアルの口から」と19節の「ツアルの中で」は違う質の苦難が問題とされていると分かる。ツアルは何と結ばれるかを問う術語である。結びつく必要のないものと結びつき、その縛りに苦しむヨブは一刻も

50 苦難の積極的意義を高らかに謳い上げている章句であるが、ヨブ記は意味の曖昧な本文が多く、解釈と翻訳は一様ではない。当該36章19節の「苦難を経なければ」にあたる本文ロー・ベ・ツァール「ツアルの只中で、ではない」（לא בצר）の部分についても、BHSは「不確かな、疑わしい」と脚注を付している。

51 もっとも現実にはこの苦難の両面は不可分であり、どちらが先だったかは言えるとしても、両方の苦難の間を激しく振動するものであろう。

早く救出されねばならない。それが16節の「ツアルの口から」であった。今19節で問われているのは、では何と結びつき、何を引き受け、何のつながりによるしんどさを実存として生きて行くべきなのかである。ヨブはロー・ベ・ツアルからベ・ツアルに戻らねばならない。それは神とつながる事と殆ど同義である。エリフはヨブに言っているのである。“苦難の只中で”，それが人間の実存なのだ。人間であり続けろ，と。

ツアル (苦難) 礼拝の原動力としての苦難

詩編107編 6節 苦難 (73) の中から主に助けを求めて叫ぶと／主は彼らを苦しみから救ってくださった。

詩編107編の神殿賛歌において動詞を入れ替えつつ4回(6, 13, 19, 28節)繰り返されるフレーズにツアル「苦難」が登場する。「苦難の中から」とあるが「から」は意識であり、本文は「かのツアルの只中で」である。6節後半「苦しみから」は「彼らの諸々の苦しみ(上述したムーツァークと同語根ツークから派生した名詞メツーカーの複数形)から」となっており原文に「から」はある。この節では両語の違いが鮮明になっている。つまり後半「苦しみから」においては、故なく強制的に追い込まれた窮状と圧迫変形の痛み(それがツークの原意であった)としてのメツーカー「苦しみ」が複数形で数え上げられるものとして表現され、解放されるべき苦しみとして前置詞「から」が付けられているわけである。これに対して、前半「苦難の中から」の原文「かのツアルの只中で」においては、ツアルは冠詞付きの単数形で表現され、前置詞「から」は使用されておらず、「かのツアルから」と記される必要のない苦難であることを示している。ここからも「かのツアルの中で」が信仰者の実存と不可分の、アイデンティティそのものと関わる苦難であると想定し得る。そのような苦難こそが礼拝の原動力である。

メーツァル (苦難) 捕囚の隷属状態としての苦難

哀歌1章3節 貧苦と重い苦役の末にユダは捕囚となって行き／異国

の民の中に座り、憩いは得られず／苦難（מַצָּר）のは
 ざまに追い詰められてしまった。

男性名詞メーツァルも動詞ツァーラルからの派生である。哀歌では捕囚の苦
 しみがこの語で表現されるが、意味は明瞭ではなく、「苦難のはざまに」の部
 分を例えば岩波訳では「袋小路で」と訳している⁵²。

苦難を中心的語彙とするツァル、ツァーラーは稀に「災い」とも訳されて
 いる。各1例ずつ取り上げることにする。

ツァル（災い） 師弟の関係性のしるしとして蒙る災い

イザヤ書30章20節 わが主はあなたたちに／災い（רָצָה）のパンと苦しみの
 水を与えられた。あなたを導かれる方は／もはや隠れ
 ておられることなく／あなたの目は常に／あなたを導
 かれる方を見る。

イザヤ書30章18-26節の「救いのとき」は前5世紀頃になされたペルシア
 時代の付加部分に属すると考えられている⁵³。ここに「ツァルのパン」が登
 場する。この20節後半には「あなた」と「あなたを導かれる方」が登場し、
 長らく姿を消していた導師（神とも預言者とも言われる）と弟子の再会と、
 新たな協働が主題になっている。弟子たるものの実存として引き受けるべき
 「災い」がツァルによって表現されている。神の恵みと導師の伴いが回復し
 た喜びの中でこそ、神の民は、依然として災い・苦難が存在する現実世界か

52 月本昭男・勝村弘也訳『旧約聖書XIII ルツ記 雅歌 コーヘレト書 哀歌 エステ
 ル記』（岩波書店、1998）、110頁参照。

53 H・ヴィルトベルガー（大島力・金井美彦訳）『神の王的支配－イザヤ書 1-39 章－』
 （教文館、1998）、189頁参照。BHS脚注によれば前置詞ミンを付加し、「災い“なき”
 パン」と読むことが提案されてきたという。おそらくは全体が救いと恵みの描写の
 単元のため、文脈にそぐわないとの理由からであろう。しかしペルシア時代の民の
 隷属状態の困窮には合致しており、本文に矛盾はないと考える。

ら、離れることなく生きていくことが出来るのである。

ツァーラー (災い) 解放さるべき魂の災い

詩編143編11節 主よ、御名のゆえに、わたしに命を得させ／恵みの御業によって／わたしの魂を災い (הרה) から引き出してください。

敵の絶滅を主に祈る詩編143編ではツァーラーが「災い」と訳されている。「わたしの魂を災いから」の部分は原文では「わたしの魂のツァーラーから」であり、ここでは正しく前置詞ミン「から」がついている。苦難「からの脱出」を含意する前置詞ミンはツァーラーに多く、ツァルには稀である。これは男性名詞ツァルが実存的立ち位置を表すのに対し、女性名詞は現実には生起する現象としての具体的な苦難を表しているからであろう。甘受すべき苦難と、甘受し続けてはいけない苦難、踏み留まるべき災いと、逃げ出すべき災い。ツァルとツァーラーの多様な射程は、苦難をめぐる信仰的態度に一面的固定的なあるべき像 (諦観・甘受の美德) などではなく、時と状況の中で現場と当事者が決断していくべきものであることを教えている。

F その他 (バツラーハー、ハヴヴァー、アーハル、ピード、シャーメーム)

最後にこれまでの5分類に含まれなかった本論考察対象語残りの5単語について概観する。

a バツラーハー (בלהה)

バツラーハーはヘブライ語聖書に10回登場する。この10回のうち新共同訳は1回を「災難」と訳している⁵⁴。

バツラーハー (災難) 義人が喝采する因果応報的災難

詩編73編19節 彼らを一瞬のうちに荒廢に落とし／災難 (בלהה) に

54 新共同訳は残り9回のバツラーハーの訳語を「破滅」(イザ17:14他5箇所)、「恐怖」(エゼ26:21他2箇所)と訳出している。

よって滅ぼし尽くされるのを

バツラーハーは動詞バーラハ (בלה) 「苦しませる」から派生の女性名詞で、恐怖に満ちた出来事を指す。災難の持つ感情面での反応を射程に入れている。詩編では世の中の不条理を許せない詩人が、義人の溜飲が下がるような悪人の滅び、つまり恐怖にひきつりながら悪人が滅ぶ日の臨むことをこの語で祈願している (詩73:19)。

b ハツヴァー (הַצָּוָה) およびホーヴァー (הוֹוָה)

ハツヴァーはヘブライ語聖書に16回登場する。この16回のうち新共同訳は1回を「災い」と訳している⁵⁵。ホーヴァーはヘブライ語聖書に3回登場する。この3回のうち新共同訳は2回を「災い」、1回を「災難」と訳している。同語根のためまとめて取り扱う。

ホーヴァー (災い) 不落神話崩壊時の国家の機能不全としての災い

エゼキエル書7章26節 災い (הוּה) に災い (הוּה) が続き／悪い知らせが相次いで来る。彼らが幻を預言者に求めても得ず／律法は祭司から失われ／助言は長老たちから失われる。

ホーヴァー (災難) 異教呪術の無力が露呈する国家滅亡の災難

イザヤ書47章11節 だが、災い (רעה) がお前を襲うと／それに対するまじないを知らず／災難 (הוּה) がふりかかっても、払いのけられない。思いもかけない時、突然、破滅がお前を襲う。

ハツヴァー (災い) 国家の末期的症状として信仰共同体を襲う災い

詩編57編2節 憐れんでください／神よ、わたしを憐れんでください。わたしの魂はあなたを避けどころとし／災い (הוּה) の過ぎ去るまで／あなたの翼の陰を避けどころとします。

55 新共同訳はハツヴァーを残りの箇所では例えば「欲望」(箴言 10:3 他)、「滅ぼすもの」(詩 52:9 他)、「滅び」(ヨブ 30:13 他)、「破滅」(箴 19:13 他)等と訳出している。

ハッヴァー／ホーヴァーは動詞ハーヴァーから派生の女性名詞である。動詞の原意は「なる」「ぼかんと口を開ける」「願望する」と様々に想定される。「なる」が名詞化したものが神の固有名詞（יהוה）であり、「ぼかんと口を開ける」「願望する」が名詞化したものがハッヴァー／ホーヴァー「地割れ」「（悪い意味での）欲望」となり、さらには「破滅」「滅び」を意味するに至った。丁度、神のようになろうとした人間の帰結を暗示するかのようには大変ネガティブな響きの名詞である。イザヤ書とエゼキエル書においては、ホーヴァーは願望の投影に過ぎない空虚な幻想の上に成り立っていた国家や社会が、その馬脚を現す程の深刻な大惨事に関係している。自国の安全神話（エゼ7:26）、世界帝国の呪術（イザ47:11）がこの語によって告発されている。空しきものに依存していた社会に災いが訪れる時、プロフェッショナルである筈の者達も機能不全に陥っている。こうして、ホーヴァーの射程として、国家の末期的症状の露呈や極端な暴走と深く結びついた災い、災難を確認し得る。その中には嵐の中に置かれた礼拝共同体の浴びる災いも含まれるであろう。それ故、「災いの過ぎ去るまで」、原文「複数のハッヴァーの過ぎ去るまで」とホーヴァーの同語根を用いてなされる詩編の嘆願と感謝を、形式主義的に捉えることは適当ではないだろう（詩57:2）。サウルに迫害されるダビデと国家に迫害される信仰共同体がこの語によって結びつけられている。

c. アーハル（עַחַל）

アーハルはヘブライ語聖書に15回登場する。この15回のうち新共同訳は4回を「災い（をもたらす）」と訳している⁵⁶。

アーハル（災い） 混沌と無秩序化を招く災い

ヨシュア記7章25節 こう宣言した。「お前は何という災いを我々にもたら

56 新共同訳はアーハルを残りの箇所では例えば「困ったことをしてくれたものだ」（創34:30）、「苦しめる」（士11:35）、「煩わす者」（列上18:17, 18）等と訳出している。

した (עכר) ことか。今日は、主がお前に災いをもたらしされる (アカル) (עכר)。」全イスラエルはアカンに石を激しく投げつけ、彼のものを火に焼き、家族を石で打ち殺した。

動詞アーハル「かき混ぜる」「邪魔をする」「悩ます」の原意は「混濁させる」「濁った」である。創造は混濁を解きほぐして救う秩序化の側面を持つが、アーハルは秩序や境界線を乱す混沌化の射程を持つと言えよう。アーハルは小事の過失が部族や民族の絶滅を招きかねない事例に登場する (ヨシ7:25, 訳語は「災い」ではないが創34:30も)。聖絶すべき戦利品を着服したアカンの罪は敗戦, 不敗神話崩壊, 民族絶滅危機をもたらすものであった。いわばアーハルは、神の線引きを軽く考えたことの帰結として生じる災いである。

d ピード (פִּיד)

ピードはヘブライ語聖書に4回登場する。この4回のうち新共同訳は1回を「災難」と訳している⁵⁷。

ピード (災難) 喪失・消滅としての災難

箴言24章22節 突然、彼らの不幸 (אִי) は始まる。この両者が下す災難 (פִּיד) を誰が知りえよう。

ピードの語根ピード／プードの原意は「消滅する」「財産を使い果たす」であり、災難における喪失や枯渇と関連している。ピードが「災難」の訳語で登場する箴言24章22節は本文にはキー「なぜなら以下の理由で」(כִּי) が付いており、前21節の勧め (神と王だけを畏れるべきこと、変革者たちと付き合

⁵⁷ 新共同訳は残り3回のピードを全て「不幸」(ヨブ12:5, 30:24, 31:29) と訳出している。

うべきでないこと)の確かなことを説明している章句である。(なお、「両者が下す災難」とあるが、本文は「両者のピード」であり、「下す」は意識である。)エードとピードの対比によって“すぐに重荷に耐えかねて悲鳴をあげるのはどちらか?”“その財産枯渇や権勢消滅など想像するだにできないのはどちらか?”を聞き手自身に判断させている。ピードには有限なる存在と無限なる方、はかなく消える側と揺るぎない方を対照させる機能があると分かる。

e シャーメーム (𐤑𐤍𐤔)

シャーメームはヘブライ語聖書に71回登場する。この71回のうち新共同訳は1回を「災害(をもたらす)」と訳している⁵⁸。

シャーメーム (災害) 被造物の闊歩が人界荒廃への驚愕を惹起する災害
サムエル記上5章6節 主の御手はアシュドドの人々の上に重くのしかかり、災害をもたらした(𐤑𐤍𐤔)。主はアシュドドとその周辺の人々を打って、はれ物を生じさせられた。

動詞シャーメーム「荒れ果てた」「ぞっとさせる」は、荒廃とそれが引き起こす恐怖や驚愕といった人間の反応までを包含する術語で、物理的損壊と心的被害のどちらもが災害そのものであることを教える。サムエル記上5章における「災害」については詳細不明だが、「大地を荒らすねずみ」(サム上6:5)の金の模型を作っていることからペスト説が言われてきた。この説は、人間の生活領域においてかつてのような被造物の制御が不可能になっている荒

58 新共同訳はシャーメームを残りの箇所では例えば「絶望して」(サム下13:20)、「驚きあきれる」(エゼ26:16)、「荒れ果て」(ゼカ7:14)、「慄然とし」(ヨブ18:20)、「ぼう然として」(エズ9:3)、「圧倒し」(ヨブ16:7)、「滅ぼす」(ミカ6:13)、「驚き」(ヨブ21:5)、「おののかせた」(イザ52:14)、「驚かれた」(イザ59:16)等と訳出している。

廃状態を意味するシャーマームの射程によく合致している⁵⁹。

A-F の考察を終えて

以上、新共同訳の「災害」「災い」「災難」「苦難」の訳語からヘブライ語28語の語義と射程を検証することを通して、改めて災害・苦難について多角的、重層的に考察を深めることが出来た。「A からだ性」の項では、災害、苦難が生身の人間に及ぶものである以上、忍耐には限度があることを再確認した。「B 災いの叫び」の項では、自己を世から分離して神の側に置き、世を客観視して断罪することが預言者的伝統とは似て非なるものであることを確認した。これは神罰論を振りかざす宗教的熱心に対する歯止めとなろう。「C 神が撃つ」の項では、災害の主体となる神について検証することを通して、そこにある神意伝達の可能性と、神の攻撃の波状性が逆照射するこの世の神ならざるものが社会に常態化させている攻撃の波状性にこそ目を向けるべきであること、神が波を起こすことで打ち消そうとしている波は何か、それによって解放され保護される存在は誰かに常に目を注ぐべきことを確認した。「D 悪」の項では、善と悪の位置づけにおける二元論的思考からの脱却の必要性和、悪の問題を個人の内面の資質に還元させてはならず、常に社会的構造的に考察すべきであること、安全、幸いを享受したいというトープの志向をこそ、悪人の悪行以上に精査する必要のあることを確認できた。「E 苦難」においては苦難の二面性と、それ故一面的な苦難に対する意味づけの危険性について再確認した。「F その他」においては、特に共同体、被造世界に対する攻撃としての人間が引き起こす災害について確認した。安易な神罰論や、甘受・諦観の美德（殉教者の美化も含めて）と言った“信仰的態度”という名の硬直した教条主義に陥ることなく、真に災害、苦難の現実を見据

59 例えば出エジプト記 23 章 29 節「しかし、一年間は彼らをあなたの前から追い出さない。さもないと、国土は荒れ果て (שממה)，野獣の数が増し、あなたに向かって来る。」のシャーマームから派生の女性名詞シェーマームの用例（他にイザ 1：7，6：11 等）を参照。

えて臨機応変にまた肌理細やかに、聖書から聞き続けるべきことを28語のヘブライ語とその章句が示していると思われる⁶⁰。

(以上)

60 追記 現代ヘブライ語のアソーン「災害」について

本論では新共同訳の4訳語を対象を限定して論じたが、この限定によってアソーンが除外されてしまったことは示唆的である。現代ヘブライ語において「災害」は「アソーン」、「自然災害」は「アソーン・テバア」（訳せば「自然の災害」）、「天災」は「エタネー・ハッテバア」（訳せば「かの自然の力強い諸力」）である。

このアソーンは、ヘブライ語聖書には5回しか登場せず、「災害」とも訳されない。新共同訳聖書では2つの訳語が使われている。一つ目は「何か不幸なこと」でヨセフ物語に3回（創42：4, 38, 44：29）、具体的にはヤコブの息子たちが食糧買出しにエジプトに旅立つ際、“末の子ベニヤミンだけは手許に留めておきたい”と父ヤコブが心配する場面に用いられる。もう一つの訳語は「損傷」で、これは出エジプト記21章契約の書に2回（出21：22, 23）、具体的には妊娠中の女性が巻き添えで流産させられた時の規定に用いられる。いずれの文脈も、成人男性が決めて始めた事柄の過程で、偶発的に起こる悲劇である。巻き添えになる形で、奪われる必要のない命が奪われる。もっと一緒にいたかった、いられる筈だった親子が引き裂かれ、共にあることが出来なくなる。子どもの命の喪失。遺された親の悲嘆と有形無形の傷。聖書のアソーンはきわめて個別的・具体的な家族の事例に限定して使われている。

アソーンの語にみる現代的巨大さと聖書の小ささは、楕円の二つの焦点のように示唆的である。この「アソーン」の元々の意味は何かというと、「悲嘆に包まれている」である。災害とは悲嘆に包まれていることである。この原意は私たちに、因果律の詮索などではなく、悲しみと嘆きに目を注ぐべしという、忘れてはならない基本を教えてくれている。